

## 歴史物語の系譜と『増鏡』

— 継承性と自律性の観点から —

福田 景道

たゞおろ／＼見及びし物どもは、水鏡といふにや。

神武天皇の御代より、いとあら／＼かにしるせり。かの次には、大鏡、文徳のいにしへより、後一条の御門まで侍しにや。又世継とか、四十帖の草子にて、延喜より堀川の先帝まではすこし細やかなめる。又なにがしの大臣の書き給へると聞き侍し今鏡に、後一条より高倉院までありしなめり。まことや、いや世継は、隆信の朝臣の、後鳥羽院の位の御ほどまでをしるしたるとぞ見え侍し。その後の事なん、いとおぼつかなくなりけり。(中略)まことに事のつゞきを聞えざらんもおぼつかかなかるべければ、たえ／＼にすこしなん。(二四九頁)

『増鏡』の序の一節である。ここには『栄花物語』(「世継」を除く歴史物語各作品が時間的に連鎖することが重視されている。すなわち、神武帝に起筆して仁明朝までを収める『水鏡』と、仁明帝の次の文徳帝以後を対象

とする『大鏡』とは時代的に間断しないことが確認され、さらに、後一条帝在位中のある一日を最終時点とする『大鏡』を直接受け継ぐのが『今鏡』で、『弥世継』にそれ以後が扱われると明言される。これによると神武帝の時代から後鳥羽朝あたりまでは仮名文の日本通史が完備していたことになり、通史をさらに鎌倉最末期まで延長するために『増鏡』が著わされたという趣旨が看取できる。後鳥羽院以後を補って、鏡物の連鎖を維持するために『増鏡』は『弥世継』の統編として著作されたと宣言するかのようである。なお、この一節が、『増鏡』の歴史叙述が後鳥羽帝に発する唯一の根拠となることも看過できない。

ところが、仮名文の通史の一部を形成できる作品は他にも存在する。たとえば、『六代勝事記』や『五代帝王物語』は歴史物語の範疇に含まれる場合もあって、文学史構想上無視できない。両書を視野に入れてみると、『今鏡』以降の歴史物語の展開には別様の流れが想定できるように思われる。事実、『五代帝王物語』こそが『弥世継』を継受して成立した作品と見なされる場合がある。

『今鏡』の最終年次を踏まえて『六代勝事記』が著されたと考えられ、『六代勝事記』の後を補うのが『五代帝王物語』であると言われることもある。高倉帝から後堀河帝までの六代、後堀河帝から亀山帝までの五代の歴史を仮名文で叙述した両書は内容的にも歴史物語と無関係ではあり得ない。結局、『今鏡』以降の継承関係には、以下の三つの経路が成り立つ可能性がある。(『六代勝事記』に扱われる期間が『増鏡』と大幅に重複するため、両者に継承関係は認められない。)

A 『今鏡』↓『弥世継』↓『増鏡』

B 『今鏡』↓『弥世継』↓『五代帝王物語』

C 『今鏡』↓『六代勝事記』↓『五代帝王物語』

これらの可能性はすべてが無条件に共存できる性質のものではない。BやCが認められるとすれば、『六代勝事記』と『五代帝王物語』が先行して成立していたにもかかわらず、『増鏡』序では無視されたことになる。『増鏡』著作に『五代帝王物語』が参看されたことはほぼ確実で、その点からもAは再考されなければならなくなるであろう。それに伴って、歴史物語に『六代勝事記』を加えることの是非、『五代帝王物語』の位置付けなどの問題も生じるであろう。

ところで、右の把握方法は作品の外郭と内実とを同一化する考え方に基づく。つまり叙述の対象に選択された期間(時代)を極度に重視して歴史文学作品の本質を規定する立場に通じる。そこで、次に、このような見方や

立場が歴史物語やそれに類する作品群の性格規定にどの程度有効であるかに触れておきたい。

## 二

歴史物語(歴史文学)が歴史を題材とする文学であっても、文学的に表現された歴史であっても、「歴史」が内包されることに変わりはない。内容が「歴史」であるかぎりには、その性格を考えるに際して、どういふ「歴史」を対象とするかは決して軽視できない。そして「歴史」が「時間的、作用的連関的統一」をもつものであるとすれば、統一性のある一時代(期間)が叙述の対象に選ばなければならない。また、選ばれているはずである。統一性のない過去を記述するだけの書物は記録ではあっても歴史文学とは見なし難いであろう。無秩序な過去は時間的に限定されることで統一性を与えられて「歴史」に転じ、それが歴史文学の素材になり、歴史文学そのものになり得るのではないだろうか。歴史にかかわる作品は、いつからいつまでを取り扱うかでその性格や価値が決定される慣習をかつて指摘した。歴史物語(歴史文学)は叙述に値する一定の期間を得てはじめて存立できるのである。

このような見方は「歴史文学は、まずその題材を限定したとき、事件や時代の範囲を決定したときに、すでにその主張を明らかにしたと見るべきである」という松尾

葦江氏の見解<sup>9)</sup>に通じる。ここに言われる「時代の範囲」が統一的に把握される一時代にほぼ相当するであろう。ただし一樣に歴史文学と言っても、一事件（一戦乱）を中心にとまる軍記物と、吸引力のある核心を持たない歴史物語とは事情が異なる。『保元物語』の保元の乱や『承久記』の承久の乱のような比較的短期間に収まる核心的事件をもち得ず、一般に長期間を対象にするために焦点が不明確になりがちなのが歴史物語の特性になる。そうすると、松尾氏の言われる「範囲」の決定に基づく作品の性格規定は、歴史物語において一層有効に機能するであろう。（以下この「範囲」を「歴史領域」と仮称する。）

さて、歴史物語の性格を規定する「歴史領域」は、具体的には一連の歴史叙述の発端と最終時点によって表わされるが、それらはたしかに重要な意味を有している場合が多い。たとえば、最終時点の重要性は、『大鏡』における万寿二年五月が藤原道長の栄華を理想化するために選ばれた最高の一瞬であること<sup>10)</sup>、『増鏡』の最終記事の解釈の多様性がそのまま作品全体の主題の多様な把握を導くこと<sup>11)</sup>などから十分に推測できる。

しかし、ここでは前作を継受する姿勢の問題として、各「歴史領域」の始発時点が特に注目される。『今鏡』が『大鏡』を継受することと、『大鏡』が後一条帝在位中を最終時点とするのを承けて『今鏡』が後一条帝紀に始められることが同義であるように、歴史物語の時間的

発端は、前代を対象とする既存の作品を継承することの徴証となるからである。

ところで、桜井好朗氏は、無秩序に発生する出来事に歴史的な意味をもたせて（因果関係によって系列化して）歴史叙述を成立させるためには「始原」（時間の流れの原点）が観念的に設定されなければならないと主張する。たとえば、慈円における伊勢・春日・八幡の連合（議定）が「始原」に相当する<sup>13)</sup>。このような歴史叙述を可能にする「始原」があるなら、「歴史領域」の始発時点とは別にもう一つの起点が見いだせることになる。歴史叙述の発端と、その歴史叙述を成り立たせるような観念的な起源とが併存する。（以下、「歴史領域」の具体的な始発時点を「起点」と呼んで「始原」と区別する。）

「起点」と最終時点とによって範囲を限定された「歴史領域」が、「始原」とともに歴史物語の性格を決定的に左右するのである。これを前提にしてA・Cの三系譜を検討してみる。

### 三

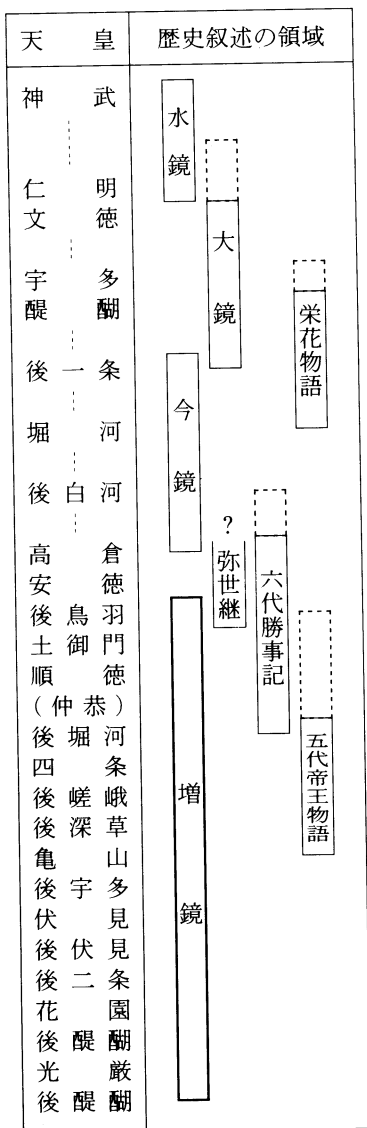
まずC系譜（『今鏡』↓『六代勝事記』↓『五代帝王物語』）の妥当性を問題にする。『増鏡』序に『今鏡』を受け継ぐことが明記される『弥世継』や『増鏡』と相違して、『六代勝事記』と『五代帝王物語』の場合は歴史物語（鏡物）の系列に属することが必ずしも自明のこと

にはなっていない。その根本的な因由は、両書には鏡物の系譜に自らの作品を位置付ける架空の語り手が存在していないからであろう。

『今鏡』は、大宅世継の孫女を自称する老嫗の発言によって、先蹤作品『大鏡』の最終時点以後を書き継ぐために著作されたと表明される。『水鏡』には、『大鏡』に省略された仁明朝以前を仙人が補った歴史語りを一修行者が伝えたという構想が明示される。しかもこの二書においては、執筆に際して『大鏡』の「鏡」を受け継いでその書名が考案されたものであるとも明かされている。なお、明和八年（一七七二）になって荒木田麗女に執筆された『池の藻屑』と『月のゆくえ』にも老人の昔語りを筆録するという体裁が固守されて鏡物系譜の欠落が補修される。『水鏡』のさらに前を補う『秋津島物語』や

中国史を和文で綴る『唐鏡』にも鏡物の形式は確実に踏襲されている。特に『月のゆくえ』は序文において『大鏡』などの先蹤作品と関係付けられて、『弥世継』が散逸したために生じた空白を埋める目的が顕示されているし、『池の藻屑』にも『増鏡』以後の歴史を補うためと察知させられる記述がみられる。

このように、鏡物の系譜は作品内部において、仮設された人物が保証する継承意識によって顕在化する。作品自身が告白する系譜（継承関係）なのである。もしもこれを歴史物語の系譜に属するための必須条件にするならば、『六代勝事記』と『五代帝王物語』をその系列に組み込むことは到底不可能になる。この二作品には自らを歴史物語（鏡物）に定位させる超老人の語りが存在しないからである。たしかに、鏡物と呼ばれる作品群の内実



起点から最終時点までの範囲  
 始原から最終時点までの範囲

は一見して多様で、語りの趣向や明記された継承意識に依拠しなければ一括は困難ではあろう。しかし、語り形式は作品の主題や構想に直結するものではないし、継承の意図は明文化されなくても存在し得るものである。

歴史物語の語り手が超現実的な長命者である理由はさまざまな方面から考究されているが、それは作品の「歴史領域」に関与すると思われる。古老の昔語りの形式による歴史物語作品は、現存するものに限ってはあがあるが、例外なく百数十年以上の長期間を扱っている。現実存在する人物では決して語り手になり得ない長さである。

歴史物語の主題・性格が歴史叙述の「起点」と最終時点に区切られる「歴史領域」によって規定されるとしたら、古老の年齢も同時に規定されたと言えるのではないだろうか。まず「歴史領域」が設定されて、それに基づいて語り手が常識を超えた長寿者にならざるを得なかったという事情も考えられる。そうすると、『六代勝事記』や『五代帝王物語』は、対象に定められた期間が現実的な一人の人間の寿命をもって十分に見聞可能な長さであることよって、超現実的な高齢者を必要としないことになる。本文中に歴史物語の系譜を継承する意図が古老の口から語られない点、文体や記事の選択方法が既存の歴史物語と相違すると考えられる点など問題は残るが、継承意識の直接的表出は歴史物語の絶対的な条件とはなり得ない。文体や基調の相違は、『栄花物語』と『大鏡』、『今鏡』と『水鏡』などの間にすでに顕著であった。

また、弓削繁氏は中世の歴史叙述の特徴として「鏡物が歴史の一部始終を見聞したという古老の語り手を登場させ問答体の歴史語りの場を仮構するのと異なり、著者自身が自らの体験を語る」という点を指摘する<sup>(15)</sup>。たしかに『六代勝事記』や『五代帝王物語』は昔語りを筆録する人物をもたないし、問答体で全編が包括されてもいない。その意味では鏡物の系譜からは截然と区別されなければならぬ。しかし、「著者自身が自らの体験を語る」というのははたしてそのとおりであろうか。著者が体験を語る結構になっているのは間違いないが、そこに形象化された著者像が現実の著者の実像である確証はない。

従来の『六代勝事記』や『五代帝王物語』の研究においては、作品に記述されている著述者の経歴に基づいて、それを寸分も疑わず、作者や成立時期が推定されてきたようである<sup>(16)</sup>。しかも『六代勝事記』の場合は編年体的叙述の最新記事の時点の直後に体験記として成立したと言われ、虚構の介入する余地は少ない。また、「歴史領域」と執筆時期の近接は歴史物語としては異例である。しかし、体験記と見なされるのも著者自身に関する本文の記述を黙認した結果にすぎない。『六代勝事記』や『五代帝王物語』が自ら語る作者像は、現実には著作した匿名の人物のものとは断定できないのではないだろうか。語り手と作者を分離するに値するだけの論拠はもたないが、逆に、著者が自己の経歴を正直に告白していると言いつけるだけの根拠もない。仮設された人物が歴史を体験と

して語るといふ虚構的設定が認められるかもしれない<sup>(18)</sup>。もしも語り手(著者)が仮構されているのなら、いわゆる中世の歴史叙述よりも鏡物の形式の方に近くなる。『愚管抄』『神皇正統記』や漢文体の諸記録と、『六代勝事記』などが同趣の作品であると無条件には断定できないように思われる。

こうして、古老の歴史語りの形態から歴史物語の系譜を定めるのは、不確定な要素が多く、必ずしも有効な方法ではないことが窺知され、改めて「歴史領域」(「起点」と最終時点との間隙)が注目される。これらはある程度客観的に読み取れるので、各作品の継承関係を考える上で比較的厳正な根拠となるであろう。歴史語りの形式よりも実際に取り上げられる「歴史」の領域の方が歴史文学にとって本質的な問題を提供するのは言うまでもない。以下に、「始原」「起点」「歴史領域」に内実が規制されるといふ観点から、改めて『六代勝事記』と『五代帝王物語』を位置付けてみる。

『六代勝事記』は高倉帝の出自・立場・践祚から承久の乱後の三上皇配流までが編年体的に叙述される体裁をとる。「六代」とは高倉帝から後堀河帝までの六帝王を意味することは序文末尾の列挙記事から明らかである<sup>(19)</sup>。ところが、それにもかかわらず、実際には保元の乱に遡って語られる部分がある。作品内の著者の生年からは体験できない時点の叙述がはっきりとなされているのである。これは『六代勝事記』の最終時点に位置する承久の

乱との関連で説明できる。つまり、この作品は「普天かきくもりし夕立の神なり」に例えられる承久の乱に驚嘆して「其事のわすれざるはし／＼ばかりを書きあつめ侍」ものと設定されていることに矛盾せず、承久の乱を中心に成り立ったものであって、保元の乱は承久の乱の発端と見なされている<sup>(20)</sup>。ここでは高倉朝が「起点」で、保元の乱が「始原」になる。

これに従うと、承久の乱が著作の契機になったという作品中の発言が事実であることになり、あえて体験外のこととして「始原」を語るのは著者の境遇が鏡物のように仮構されていないことの反映とも見られる。しかし、「始原」とは別に「起点」が設置されたことには一つの特殊事情が考えられる。『今境』を継承する意図である。高倉朝の半ばで中断している『今鏡』を時間的に継承するため、本来なら保元の乱に書き起こされるべきであるのに、高倉朝を形式的な「起点」としたと解釈できる。もしも著者が実際の経歴を正直に作品化したとしたら、彼がたまたま『今鏡』の「歴史領域」の直後の時代だけを体験できた人物であって、その歴史語りが偶然『今鏡』に直結してしまったことになる。その偶然に比べると、『今鏡』を継承しようとする意図をもって『六代勝事記』が形成されたために高倉朝が必然的に「起点」になったと見なす方が自然であろう。

次の『五代帝王物語』で後堀河帝即位時が「起点」とされるのも、後堀河帝の治世を最終時点とする『六代勝

「事記」を承けてのことと思われる。書名の「五代」は『勝事記』の「六代」に対応し、両書の緊密な関係がうかがえる。また、『五代帝王物語』には外枠で五代の天皇によって作品が統括されるにもかかわらず後嵯峨院物語の形成が志向されている。その「核心」としての後嵯峨院の正統性の根拠には、形式的「起点」後堀河帝がなるのではなく、さらに遡って後鳥羽院が相当されるのである<sup>(23)</sup>。後堀河院が「起点」となって『六代勝事記』に接続するのに対して、後鳥羽院は「始原」として作品の論理を支える。なお、この構造は『六代勝事記』に六代が扱われながら承久の乱の顛末に「核心」があり、表面的な「歴史領域」の範囲外の保元の乱を事実上の起点とすることと相似する。これらから『五代帝王物語』に『六代勝事記』を継承する一面があると判断して大過はなからう。冒頭の文面からも『五代帝王物語』の継承意識は推察できる。

神代より代々の君の目吹き御事どもは。国史世継家々の記に委しく見えて。後鳥羽院の御代まではかくななくみえ侍めり。承久の事どもは。人成存知の事なるうへ。委はいたく知侍らず。後堀河院の御時の事。又未生れぬ世の事なれば。いかに僻多侍らめど。聞及にしたがひてをろく注付はべり<sup>(24)</sup>。

後鳥羽院時代や承久のことが周知されているというのには『六代勝事記』の存在が大きく関与すると思われる。作品中の著者が実見できない後堀河朝にあえて起点を設

定することは承久の乱まで筆をとどめた『六代勝事記』を継承するためと見なせるであろう<sup>(25)</sup>。(なお、『弥世継』を受け継ぐ可能性については後述する。)また、先蹤作品の中にはつきりと「世継」を加えているように、歴史物語の系譜と無関係ではないのは確かである。「代々の君の目吹き御事ども」を対象とするのも先行歴史物語に近いものがある<sup>(26)</sup>。

以上のことから『五代帝王物語』に、形式的叙述範囲「歴史領域」の上で『六代勝事記』を継承し、内実において歴史物語の系譜に属する性格があることが明らかになる。この『五代帝王物語』の継承意識によって、文体や内容の点でむしろ軍記物に接近して歴史物語の一群に含め難い面をもつ『六代勝事記』も『今鏡』と『五代帝王物語』の中間に改めて位置付けられると思われる。『五代帝王物語』の成立によって『今鏡』と『六代勝事記』の系列化も鮮明になり、Cの系譜が妥当性をもつに至る。

歴史語りの形態ではなく、歴史叙述の通史的連続の点で『六代勝事記』と『五代帝王物語』は『今鏡』の系列に属する。この二書は旧来の歴史物語諸作品とは異なる点が多いことは間違いないが、「歴史領域」の上からは歴史物語の連続に組み込まれるのである。

四

A・Bの系譜についてはまず『弥世継』の存在が問題になる。散逸したこの書に関しては『増鏡』の序文に簡単な説明がある以外は、わずかに『本朝書籍目録』の注記から二巻本の存在したことが知られるにすぎない。『増鏡』によると高倉朝から後鳥羽朝あたりを対象にしたらしいが、厳密な「起点」と最終年次は特定できない。「起点」が明記されないため、高倉朝からとする理解のほかに安徳朝に起筆するという見方<sup>29</sup>もおこなわれる。また最終時点の捉え方も流動的で、高倉・安徳朝を中心にすると言われて後鳥羽朝が除かれることも多い。『弥世継』散逸を補う意図で執筆されたらしい『月のゆくえ』も高倉・安徳二代を取めるが、散逸した内容を推定してのことではないと思われる。要するに『弥世継』に関しては『今鏡』と『増鏡』の間の空白を埋めること以外は不明なものである。

また、かつて指摘したことであるが、予想される『弥世継』の叙述の時間的範囲は他の歴史物語に比べて異様に短い。仮に高倉帝即位から後鳥羽帝讓位までとしても三十年にしかならない。その期間に在位した帝が二人か三人なのも少なすぎる。したがって、この作品には超現実的な長命者は不必要になって、既存の歴史物語とは完全に乖離することになる。

和田英松氏は「大鏡、今鏡などにならひて、序文をそ

へ、今鏡、増鏡の如く、篇名を附したるもの」と述べられ<sup>32</sup>、鏡物との類似性を予想されたようであるが、その論拠は明らかでない。むしろ作品の規模から見て『今鏡』などとはかなり異なった形態だった可能性もある。『大鏡』や『今鏡』と同列に並べられるだけの存在感もつていたとは到底考えられない。そうすると、作品の規模、対象とされる「歴史領域」、語り手などの異質性と合わせて、『弥世継』が『今鏡』を全面的に継受するとは即断できなくなる。

したがって、系譜A・Bの前半(『今鏡』↓『弥世継』)は無条件には容認できないと言わざるを得ない。

Bの後半(『弥世継』↓『五代帝王物語』)は、特に「起点」と最終時点を重視した系列化の観点から問題がある。「後鳥羽院の位の御ほどまで」とあることによって後鳥羽院政期全部が『弥世継』に含まれると見なされるのであるが、「位の御ほど」は在位中のみを意味するのではないだろうか。そうすると、『弥世継』には後鳥羽帝在位中までが扱われると考えられ、『五代帝王物語』は後堀河帝からではなく後鳥羽帝から叙述しなければならぬだろう。『大鏡』が後一条帝在位中に終わるのを受ける『今鏡』は後一条帝治世全体を再び「歴史領域」に包含し、『増鏡』が後鳥羽院の踐祚に「起点」を定めるのは『弥世継』が「後鳥羽院の位の御ほど」に中断するからと見なされている。歴史物語が連鎖する時には接点に相当する治世が重複して取り扱われるのである。重複



の可能性のない系譜Bはますます成り立ち難くなる。

また、後述するように『増鏡』においては歴史物語の系譜を継承するよりも、『増鏡』作品自体の統一が優先されている。「起点」も作品の構想に誘導されたもので、『弥世継』を継承する意図は相対的に弱体化する。何よりも『六代勝事記』や『五代帝王物語』を秘匿したこともあって、『増鏡』の序は信憑性に欠ける面がある。よって、Aの系譜も妥当性を減じる。

こうして、A・Bの系譜に難点があることが明らかになる。

## 五

『今鏡』の後を承けて成立した通史的歴史文学の諸作品はいくつかの系流を形づくった。そのうち、『弥世継』を機軸とする系譜の一つ(A)は『増鏡』の序文に明言された以外の根拠を見いだせない、極めて不安定なものである。同じく『弥世継』を経由して『五代帝王物語』に連絡する流れ(B)は、歴史物語の時間的連鎖の点からはほとんど意味をなさない。一方、『今鏡』から『六代勝事記』、さらに『五代帝王物語』へと連なる、もう一つの展開(C)は、外部徴証はまったくないけれども、「歴史領域」を問断させない一点によって最も蓋然性をもつと思われる。

『六代勝事記』は高倉帝から後堀河帝までを、『五代

帝王物語』は後堀河帝から龜山帝までを均等に扱って編年史を形成するかに見えて、実はそれぞれに承久の乱、後嵯峨院時代などの不動の「核心」をもつ。それに応じて保元の乱や後鳥羽院が「始原」になり得る。明確な「核心」「始原」などを有しながら、なおかつそれとは別に通史的枠を設定するのである。その枠組は既存の歴史物語を継承することを証明する。こうして、『水鏡』『大鏡』『今鏡』の連続によって神武帝の昔から高倉帝治世までを覆った通史の流れはさらに龜山朝まで延長されたのである。その確固とした系譜には『弥世継』などが介在する余地はもはやない。

『増鏡』序文で明示されるA系譜はきわめて不安定で、まったく無視されるC系譜が妥当性を有する。そこで注目されるのはC系譜が確立した後に生成した『増鏡』の「歴史領域」である。

『増鏡』は冒頭と末尾に承久・元弘の両乱を配置する。ともに公家勢力の討幕の企てに発し、治天の君の隠岐配流という衝撃も共有しており、緊密な連関が予想される。ところが、この首尾照応が偶然的所産と見なされる場合がある。<sup>35</sup> こう考えられるのは、一つにはこの照応が『増鏡』に大覚寺統の正統化の意図を読み取らせると見なし、それを否定するためであり、いま一つには『弥世継』を受け継ぐという『増鏡』序の言辞を是認するからであるらしい。しかし、前述のように『増鏡』による『弥世継』理解には疑念が残る。後鳥羽院と後醍醐帝を結び付ける

意図と大覚寺統を支持する姿勢とが本来一致しないのも言うまでもない。<sup>36</sup>大覚寺統方であるか否かにかかわらず『増鏡』の世界が承久の後鳥羽院と元弘の帝王後醍醐によって両端から規制されるものであることは紛れもない事実である。<sup>37</sup>歴史文学にとって叙述の対象とされる期間（「歴史領域」）が大きな意味をもつと強調するまでもなく、『増鏡』の場合は明白に首尾の対応に意味がある。

すでに説かれるように、後鳥羽院中心の部分を包括して後醍醐帝を核とする物語的世界が構想されていると考えられる。<sup>38</sup>また、後鳥羽院は「始原」と「起点」を一致させる。最終時点の主役後醍醐帝は全編の「核心」でもある。これによって「歴史領域」は強固に統一され、『増鏡』統一の根拠になる。<sup>39</sup>ここでは詳述しないが、『六代勝事記』や『五代帝王物語』のそれに比して極めて強固な枠組を想定して過誤はないであろう。

『大鏡』を継承することに最大の根拠をもって『今鏡』の「歴史領域」はおのずから定められた。『水鏡』の叙述は『大鏡』の前代を補筆する範囲に限定された。これらの散漫さは「歴史領域」だけでは一作品を統一できない好例となる。それに対して『増鏡』の場合は領域それ自体に統一性があり、主題をも規制する。

ただし、対象とされた「歴史領域」以前の先例が重要視され<sup>40</sup>、帝王は王朝盛時の華美を体現するように造型され、<sup>41</sup>廷臣の動向は王朝貴族社会の展開を忠実に模写している。<sup>42</sup>「歴史領域」のはるか以前が（「始原」ではないが）

規範になっているとも思われる。しかしながら、他の鏡物や『六代勝事記』・『五代帝王物語』などの通史的歴史文学と比較すると『増鏡』の「歴史領域」による統一度は群を抜く。『大鏡』と比べても遜色ないであろう。

このように完結した叙述対象を取得しながらなおかつ『増鏡』序は歴史物語（鏡物）の系譜に自らを定位するのである。それは『今鏡』から『六代勝事記』や『五代帝王物語』へと続く連鎖を断ち切って、新たな系譜を形成するためであったと思われる。

先行する『大鏡』や『今鏡』などとは明らかに異質な内実を志向するにもかかわらずあえて既存の歴史物語の形式的「歴史領域」を尊重して、通史の流れを重複させず間断させなかったのが『六代勝事記』と『五代帝王物語』である。それに反して『増鏡』は通史の完成を放棄して、強固な統一的世界の構築を目指したのではないだろうか。その上で王朝の色調を発露させるために先例を規範として取り入れ、自身を王朝歴史物語の系譜中に位置付けたのではないだろうか。その際に、再び通常の間には体験不可能な長期間が対象とされたことが、王朝世界再現の志向と相俟って超老人による歴史語りの形式を復活させたと考えられる。

また、『増鏡』作者は『五代帝王物語』の「始原」と「核心」——後鳥羽院と後醍醐院——を包摂して自作の「核心」後醍醐帝に結び付けたとも見なせる。その結果、『六代勝事記』で批判された後鳥羽院と承久の乱も、『増

『鏡』では後醍醐帝と元弘の政変の肯定的前史に転じる。

『愚管抄』において、歴史物語は「ミナタミヨキ事ヲノミ」記すため「乱世」の「ワロキ事」のみが生起するようになった保元以後を叙するにはふさわしくないと剔抉された<sup>(43)</sup>。『愚管抄』と同様の認識に立つて「ワロキ事」をも収載できる作品として軍記物などに接近したのが『六代勝事記』であり、そのことを知悉した上で旧来の歴史物語の伝統を保守したのが『五代帝王物語』の姿勢であろう<sup>(44)</sup>。その展開を受け継いで、史論や軍記物との交差を経過した成果を加味して『増鏡』の達成は可能になったと思われる<sup>(45)</sup>。

こうして『今鏡』を受け継ぐ『六代勝事記』と『五代帝王物語』が『増鏡』に吸収されて、その系譜が抹消されたため、『今鏡』と『増鏡』との間に空白期間が生じる。それを補填するために『弥世継』が必要になる。『弥世継』が存在していたために『増鏡』は後鳥羽院を発端としたのではなくて、『増鏡』の統一性が『弥世継』を要請したのである。

以上のことから、歴史物語の系譜として『今鏡』から直接『増鏡』へ繋がる第四の流れが想定できる。ただし、『増鏡』が他の作品に比して歴史物語の系譜を延長することよりも、自己完結的な世界の完成を旨とすることによってこの連鎖は脆弱なものになる。継承よりも独立が志向されたのである。しかし、一面では『増鏡』の成立によって今日見られるような鏡物的歴史物語の連鎖が頭

在化したとも言える。『増鏡』以前には『大鏡』を中心とする同心円の連鎖しか形成されなかった。傑作『大鏡』の前後を『水鏡』『今鏡』両作が補うだけで、さらに鏡物が続く保証はなかった。『秋津島物語』は、現存本では『水鏡』以前が「歴史領域」であるが、実は『水鏡』以下と重複していた可能性がある<sup>(46)</sup>。『大鏡』などと平行して『唐鏡』があったが時間的連続性はない。『栄花物語』の続編を書き続ける試みも早く挫折していた。つまり、『六代勝事記』や『五代帝王物語』によって維持されていた通史的歴史文学の連鎖と、『大鏡』を中核に同心円的に展開する純正鏡物の系譜とを『増鏡』が統合して、いわば鏡体の歴史物語の縦の系譜を描き出したのである。これ以後、『続増鏡』『弥増鏡』のような作品の制作が可能になったと思われる<sup>(47)</sup>。近世の『月のゆくえ』と『池の藻屑』も『増鏡』の存在なくしては決して生まれ得なかったであろう。連鎖や持続に意義を認めることは『今鏡』のように統一力を減退させ、独自性や活力の欠如を導く危険を伴うであろうが、鏡体歴史物語の系譜をとにかく確立させたのが『増鏡』の成功によるとは評価してよいだろう。

#### 注

- (1) 『増鏡』本文の引用は、時枝誠記・木藤才蔵校注「増鏡」(『神皇正統記・増鏡』日本古典文学大系87、昭40、岩波書店刊)により、( )内に適宜補足説明を加えた。

以下同じ。

- (2) 伊藤敬「歴史物語と史論」(中世文学会編・発行『中世文学研究の三十年』昭60・3)、加納重文「歴史物語の性格」(『国文学解釈と鑑賞』五四巻三号、平元・3)など。

- (3) 山下宏明「『増鏡』の世界」(『名古屋大学文学部研究論集(文学)』二三号、昭51・3)、弓削繁「解説」(『京都大学附属図書館蔵五代帝王物語』平元、和泉書院刊)など。

- (4) 山田孝雄「鎌倉時代の文芸」(『岩波講座日本歴史』五巻、昭9、岩波書店刊)など。

- (5) 山田孝雄前掲論文(4)、栃木孝惟「愚管抄と六代勝事記」(久保田淳他編『日本文学全史』3 中世』昭53、学燈社刊)など。

- (6) 木藤才蔵「増鏡の編集資料」(同著『中世文学試論』昭59、明治書院刊)など参照。

- (7) 岡崎義恵「歴史文学の本質」(『国文学』二巻一二号、昭32・12。同著『古典文芸の研究』(昭36、宝文館出版刊)に再録)。

- (8) 拙稿「古典教材としての『大鏡』の特異性」(島根大学教育学部『教科教育研究論集』四集、平2・3)。

- (9) 松尾葦江「歴史語りの系譜——保元物語・平治物語を中心として——」(『文学』五六巻三号、昭63・3)。

- (10) 拙稿「『大鏡』における藤原道長の理想性・序説——栄華の相対的評価をめぐって——」(『島根大学教育学部

紀要』二三巻二号、人文・社会科学編、平元・12)など参照。

- (11) 拙稿「『増鏡』と両統問題」(『島根大学教育学部紀要』二五巻、人文・社会科学編、平3・12刊行予定)参照。

- (12) 桜井好朗「歴史叙述と神話」(同著『空より参らむ——中世論のために』昭58、人文書院刊)、同「中世の歴史叙述——歴史叙述の転換のための序章」(同著『中世日本』王権・宗教・芸能』昭63、人文書院刊)など。

- (13) 桜井好朗「中世における神話と歴史叙述——慈円の事績をめぐって」(同著『中世日本の王権・宗教・芸能』(12)など参照)。

- (14) 佐藤謙三「大鏡研究——作者の問題と世継の翁の問題——」(同著『平安時代文学の研究』昭35、角川書店刊)、林屋辰三郎「世継翁の登場——歴史と伝説と文学——」(同著『古典文化の創造』昭39、東京大学出版会刊)、

- 木村紀子「かたりと書——四鏡における語り手設定の丹精——」(『奈良大学紀要』一〇号(文学・語学編一号)、昭56・12)など。

- (15) 弓削繁前掲解説(3)。

- (16) 益田宗「吾妻鏡のものは吾妻鏡にかえせ——六代勝事記と吾妻鏡——」(『中世の窓』七号、昭35・12)に十三世紀末以降の成立とする偽作説が提出されたが、平田俊春氏らに批判された。平田俊春「六代勝事記をめぐる諸問題」(『金沢文庫研究』一二巻八〜一二号、昭41・8)12)など参照。

- (17) 若桑昭子「六代勝事記——その製作年代について——」  
 『史海』一四号、昭42・3。
- (18) そうでなくても、作品中の著者（語り手）が実際の著者（作者）と当初から結び付けられていなかったことは設定の虚構性と理解できる。
- (19) 後堀河帝は「当今」とある。また順徳院は「佐渡廢帝」と書かれ、仲恭帝は乱後に「前坊」として登場し、踐祚が認められていない。
- (20) 『六代勝事記』の本文は『群書類従・第三輯』による。
- (21) 栃木孝惟前掲解説（5）、松尾章江「六代勝事記」（『歴史・歴史物語・軍記』研究資料日本古典文学第二巻、昭58・明治書院刊）、弓削繁「解説」（『内閣文庫蔵六代勝事記』昭59、和泉書院刊）など参照。
- (22) 坂井衡平著『新撰国文学通史 中巻』（大15、三星社刊）二三八頁、木藤才蔵「五代帝王物語と増鏡」（『日本女子大学紀要』文学部15、昭41・3。同著前掲書〈6〉に再録）など参照。
- (23) 松林靖明「『五代帝王物語』の怪異譚——後鳥羽院の影——」（『青須我波良』三〇号、昭60・11）、弓削繁前掲解説（3）など参照。
- (24) 『五代帝王物語』の本文は『群書類従・第三輯』による。
- (25) 『六代勝事記』の「六代」には後堀河帝までが含まれるが、その記事はほとんどない。また、同帝の即位は承久年間に行われた。したがって後鳥羽院まで、承久まで
- (26) というのは『六代勝事記』に当てはまる。
- (27) 山下宏明「いま一つの歴史物語」（『陽明叢書国書篇月報』四、昭50・12）など参照。
- (28) 外村久江「五代帝王物語考——正元二年院落書・増鏡との比較——」（肥後先生古稀記念論文集刊行会編『日本文化史研究』昭44、弘文堂刊）、庭山積「六代勝事記」の著作動機について（『文学・語学』五九号、昭46・3）、山下宏明前掲論文（3）など参照。
- (29) 石川徹「歴史物語の発展とその史的地位」（『国文学解 積と鑑賞』一五巻五号、昭25・5）、岩橋小弥太「世継考」（同著『上代史籍の研究第二集』昭33、吉川弘文館刊）、加納重文前掲論文（2）など。
- (30) 和田英松著『本朝書籍目録考証』（昭11、明治書院刊）六一二頁など。
- (31) 沼沢龍雄「歴史物語の研究」（『日本文学講座』第三巻、昭9、改造社刊）、岡一男「歴史物語」（『日本文学講座』第二巻、昭25、河出書房刊。同著『古典道遙——文芸学試論——』（昭46、笠間書院刊）、橘健二「解説」（『大鏡』日本古典文学全集20、昭49、小学館刊）、山岸徳平・鈴木一雄編『大鏡・増鏡』（鑑賞日本古典文学一四巻、昭51、角川書店刊）二〇四頁など。
- (32) 拙稿「『今鏡』に描かれる藤原道長の栄華——残映としての『大鏡』——」（『島大国文』一八号、平元・11）参照。
- (29) に同じ。

(33) 『国書総目録』などによると、高山市郷土館香木園文庫に「いやよつき」と題される『増鏡』が現存する。「世継」という名称が十分に固有名詞化していなかったためであろう。存在感の欠如を傍証する。

(34) (31)に同じ。

(35) 手島靖生「増鏡の本質」(『国文学解釈と鑑賞』一卷六号、昭和11・11)、石井順子「増鏡の性格」(『国文』七号、昭32・7)、益田宗「増鏡」と歴史」(『大鏡・増鏡』古典日本文学全集13、昭37、筑摩書房刊)など。

(36) (11)に同じ。

(37) 谷山茂「増鏡の文芸性について」(『国文学』二巻一二号、昭32・12)、坂本太郎「世継とかがみ(下)」(同著『日本の修史と史学』日本歴史新書、昭33、至文堂刊。

後に同著『修史と史学』(坂本太郎著作集第五卷、平元、吉川弘文館刊)に再録)、山岸徳平・鈴木一雄編『大鏡・増鏡』(前掲(30)二〇九・二一〇頁など参照。

(38) 西沢正二「増鏡」に関する一試論——後醍醐帝の物語をめぐって——」(『日本文芸論稿』三号、昭45・6。後に改稿されて同著『増鏡』研究序説』(昭57、桜楓社刊)に再録)、山下宏明前掲論文(3)など参照。

(39) 石田吉貞「増鏡の成立と時代」(『国文学』二巻一二号、昭32・12)など参照。

(40) 拙稿『増鏡』における過去と現在——「先例」の機能について——」(『島根大学教育学部紀要』二四巻二号、人文・社会科学編、平2・12)参照。

(41) 西沢正二「増鏡」に描かれた後鳥羽院」(『日本文芸論稿』一号、昭42・7。同著前掲書(38)に再録)など参照。

(42) 拙稿『増鏡』にみられる宮廷貴族諸流の盛衰——外戚から近臣へ——」(『国語教育論叢』一号、平3・9)参照。

(43) 『愚管抄』の引用は、岡見正雄他校注『愚管抄』(日本文学大系86、昭42、岩波書店刊)による。

(44) (26)に同じ。

(45) 木藤才蔵「『増鏡』に及ぼした平家物語の影響」(『国文日白』六号、昭42・2。同著前掲書(46)に再録)、山下宏明前掲論文(3)など参照。

(46) 後藤丹治「新たに知られた小野篁日記」(『国語と国文学』四巻一二号、昭2・12)、松村博司「秋津島物語」(同著『歴史物語 改訂版』昭54、塙書房刊)など参照。

(47) 和田英松「増鏡の研究」(『日本文学講座』第三巻、昭9、改造社刊。同著『重修増鏡詳解』附録(昭10、明治書院刊)・同著『国史説苑』(昭14、有精堂刊)に再録)など参照。

(本学助教)